

「創造的な活動」で頂点を極めるために

三 浦 慎
(株式会社三英)
代表取締役社長



私が父から卓球台メーカー株式会社三英（以下、三英）を引き継いでそろそろ20年になろうとしています。仕事を取り巻く環境は元より、社会そのものが大きく変わってきた20年でした。時代を拒まず、時代に流されず、心のままに会社をけん引したいと思いつつも、時に翻弄され一喜一憂してきました。

その中で二つだけ私が信念としてやり続けた事があります。それは、どんな環境でも①創造的「Creative」な活動を行うという事。そしてまた②それによって世界を、そして頂点を目指す、という事です。

私が信ずる「Creativeな活動」とは3つの要件を充たすもので、①前例・規範がない事やモノを創り出す事。②前向きな気持ちで取り組まれた結果、完成したモノである事。③出来上がったモノは、いつか何処かで必ず認められるという事です。例えば私達の提供する工業製品であれば、何処かでお客様に「認知して戴き」そして「買って頂く」という行為によって「認められた」という事になると信じています。モノを送り出す側として、如何に素晴らしいモノが出来上がったと自負していても、買って頂けない＝認めて頂けないモノは、単なる自己満足でしかありません。私たちは自己表現目的のアート作品を極めようとしているではありません。問題解決の手段として、デザインを行わなければならないからであります。

ドイツとイタリアのデザインはその対極にあるものとして表現されることがよくあります。例えばドアノブがあったとして、ドイツのモノはシンプルな見た目でありながら、握っただけで上に上げるのか、右に回すのかを体感的に理解できると言われています。しかしイタリアのモノは、意匠的には芸術的で他の追随を許さないものであり、押すのか引くのか下げるのか、握るだけでは理解できない製品が多いと言われます。中に仕込むパーツをその構造と共に検証した上で、全て封入出来る躯体を設計するドイツと、意匠重視で躯体を設計した上で何とかパーツを押し込むイタリア、どちらもアプローチの方法としては間違いではないのかも知れません。

三英の看板商品の一つに卓球台があります。世界最高峰のスポーツの祭典や世界選手権等のBig Eventで使用されて来ました。2016年に開催した国際大会では日本選手の活躍によってメダルを獲得し、メディアでも注目された卓球ですが、卓球台自体も「とても綺麗でありなが

ら優れた性能の台」として沢山取り上げて頂きました。一方で卓球台はその見た目以上にデリケートな性能を求められる事はあまり知られていません。経時変化・温湿度等に起因する反りが無い天板、コート面の72カ所に30cmの高さからボールを落下させ、リバウンドしたボールの高さが23-26cmの範囲内であり、しかもその平均が2mm以内の性能でなければなりません。卓球のボールは半球を2個接着して成形されており、接続部は赤道と呼ばれ、それ以外の部分と比較して高反発になります。ボール自体による反発差異がある中で、バウンドの偏差を2mmに抑えるという事は、つまり卓球台自体の反発誤差を±0にしろと規定しているに他なりません。それを可能にしたのが祖父の考案した特殊積層合板による卓球台専用天板であり、その性能を最大限に引き出す脚構造でした。脚は剛性があり、選手が天板に接触した際に発生する振動、床で発生する振動等を抑え、瞬時に天板自体の振動を収束させなければなりません。いつまでも天板が振動している事は、0.1秒台でコートを飛び交うボールに影響を与えるからです。

多くのスポーツ選手が世界の頂点を目指して、しかも国を背負い鎬^{しのぎ}を削って挑む国際大会で自社の製品が使われる事は、ある意味作り手にとっても世界を極める事だと信じて活動して来ました。2016年の国際大会に向けての製品作りでは、卓球台としては初めて積層合板を使用したデザイン性ある木製脚を使用し、世界で認知して頂く事となりました。その木脚の材料には、2011年に被災した東北・岩手のブナ材を使用した事も製品に魂を注ぎ込む切っ掛けとなりました。これらの一連の作業を通じて、①積み重ねてきた技術は嘘をつかない、②モノ作りにはストーリーが必要であり、それがあると作る側にも受け取る側にも分かり易いのだという事を学びました。培った技術に思いを重ね、容（かたち）に昇華させるという私が考えるデザインの活動が出来たのではないかと実感できた瞬間でした。

世界で勝負出来る製品を目指して活動していると、求められる内容も変化して来ます。2018年には政府が展開する「スポーツを通じて途上国の発展に寄与するプログラム Sport For Tomorrow^注」というプロジェクトをお手伝いさせて頂きました。ケニア・ナイロビに広がるスラムエリアの子供達に卓球を教え、卓球をすることで少しでも明るい未来を提供しよう！というプロジェクトでした。三英では初期段階の環境整備として、卓球台50台を寄贈し、第2弾として現地材料・現地人員による卓球台の製造を指導するというものでした。しかし、一日一食しか食事をとることができない現実を目の当たりにすることで、支援内容への迷いが生じましたが、救いは現地の子どもたちの無邪気な笑顔です。元気に卓球をしてくれる姿をみて、当初通り卓球台で支援する、この活動を通じて私たちが得るものは、お金に換えられないかけがえない大きなものになると確信しています。

伝統を革新するのは、責任感などではなく「ここは変えたい」という欲だったり意地だったりするのかも知れません。でもそれが「時代を動かす原動力になる」と感じる事が多くなりました。私たちが行っている製品づくりが、また小さな活動が何れ世界で認められ、セグメントされた小さい分野であってもトレンドとなる事を夢見て生きていきたいと思えます。

世界のどこにも、卓球台が10台あったら1台はSAN-EIだったと言われる「小さい会社」の「Super Brand」を目指して活動して参ります。

注 Sport for Tomorrow (SFT) とは、2014年から2020年までの7年間で、開発途上国をはじめとする100か国以上の国において、1,000万人以上を対象に、世界のよりよい未来のために、未来を担う若者をはじめ、あらゆる世代の人々にスポーツの価値とオリンピック・パラリンピックのムーブメントを広げていく取組み。